

〈座長報告〉

●麓 正樹先生（東京国際大学）

平成28年度第2回千葉県体育学会における一般発表5題と実践報告2題について以下に報告したい。

一般発表1題目として国際武道大学の大西基也氏より、「高等学校硬式野球部の経営に関する研究」についての発表があった。大西氏の研究は過去10年間で春もしくは夏の甲子園に1回以上出場した経験のある高等学校公式野球部部員にアンケート調査を行い、いわゆるヒト、モノ、カネのような経営的要素が、勝利にどのようにつながるかについて調べるものであった。質疑応答では、予算の調べ方、研究結果がどのようなメッセージを発するか、強いチームには何が必要と考えられるか、などに関する議論が展開された。

2題目の発表では、国際武道大学の嶋崎雅規氏より、「学校運動部活動の外部化をめぐる諸問題」についての発表があった。嶋崎氏の研究は、中学・高等学校教師の長時間労働と部活動の関連における問題について、日本における問題解決方法の一つである外部指導者の動員に関する歴史的背景と現状、また諸外国の状況を調査した。そして、現状問題の解決に向けて、全ての高校に配置されようとしている部活動指導員に、特定の部活を指導するだけでなく、コーディネーターの役割を持たせることを提唱した。これに対し、部活動指導員が学校教育の場で部活と関係ない生徒にどのように関わるのか、また他の教員とどのように連携するのかなどについての議論が展開された。

3題目の発表では、国際武道大学の伊藤清良氏より、「運動学習における修正指導に関する研究」についての発表があった。伊藤氏の研究は、鉄棒の後方伸身2回宙返りひねり下り、の修得に向けた指導において、トランポリンやタンブリングトランポリン、跳躍板など他の用具を活用して伸身の感覚を学び、鉄棒に活かすことの重要性を提唱した。質疑応答では、修正に要した期間や、選手自身の問題把握の方法などについての議論があった。

4題目の発表では千葉大学の長田卓也氏より、「陸上競技選手のピークパフォーマンス発揮に至るプロセス—大学跳躍選手に着目—」についての発表があった。長田氏の研究は、半構造化面接と複線径路等至性モデル（TEM）を用いて、大学陸上競技の跳躍選手の過去の試合におけるピークパフォーマンス発揮に至るプロセスを明らかにしようとした。質疑応答では、対象となる過去の試合の時期、プロセスの一般化などについての議論が展開された。

5題目の発表では、帝京平成大学の馬場宏輝氏より、「レクリエーション公認指導者の資格活用に関する研究」についての発表があった。馬場氏は自身の先行研究である水泳指導者、障がい者スポーツ指導者資格に続き、レクリエーション公認指導者資格取得後の、資格活用の状況についてアンケート調査を行い、現時点で回収されているデータの集計結果を示した。質疑応答では、指導の場所として学校現場が多いにも関わらず中学高校生の参加が少ない理由、資格取得者の高齢化などについての議論があった。

実践報告の1題目は、国際武道大学の西園聡史氏から「サッカーにおける得点の指導に関する事例研究—指導者と選手の相互理解を図るために—」についての報告があった。西園氏は流れの中から得点が生まれるためには、得点者自身が得点した時の考え方を明らかにすることが重要と考え、半構造化面接を用いて、大学サッカー選手に自身が得点したシーンの映像を見せて言語化させ、選手の見ている世界を明らかにしようとした。質疑応答では、インタビュアーの質問内容や指導者が得点シーンを見た場合の言語化などについての議論があった。

2題目は国際武道大学の廣瀬恒平氏から、「第31回オリンピック競技大会における7人制ラグビーに関する研究」についての報告があった。廣瀬氏は15人制ラグビーに比べ7人制ラグビーに関する研究が不足していることから、日本における7人制ラグビー発展の経緯と攻守についてのゲーム分析結果を報告した。質疑応答では、7人制ラグビーと15人制ラグビーの攻守の特徴の違いなどについての議論があった。

●馬場 宏輝先生 (帝京平成大学)

一般研究発表、実践報告に続いて大学院生ワークショップが行われ座長を担当させていただいた。今回は千葉大学大学院生を中心に6名の学生が発表し参加者から多くのアドバイスをいただいた。

高林海彩杜さん(帝京平成大学地域医療学部4年)は、「体育嫌いを克服するためのより良い授業について～特に中学入学時に着目して」について大学院進学後の研究計画を発表した。特に中学1年生に着目し、保健体育教員の関与によって改善が見込まれる体育嫌いを生まない・体育嫌いを克服できる体育授業とはどのような授業なのかを検証・実践・分析することが目的であると説明した。フロアからは、理想的な授業を実践する際に、現職の教諭ではなく自分自身で授業を実施したら良いのではないかなどのアドバイスがあった。

阿部諒平くん(千葉大学大学院教育学研究科1年)は、「陸上競技短距離種目における加速局面の疾走動作に関する一考察」について加速局面における疾走動作を真後ろから観察した際のより効率的な動作を明らかにしたいという目的に対して、予備実験による現段階での考察について発表した。フロアからは、本当に先行研究は無いのか、後ろから観察・撮影し3次元動作分析を行ったとあるが今回発表したものは結果的に2次元ではないのか、測定点が正確でないのではないかなどのアドバイスがあった。

勝野太介くん(千葉大学大学院教育学研究科1年)は、「バレーボール選手のコツ獲得のプロセス」について、これまでの研究の多くはバイオメカニクスや運動学領域の立場であり、コツ獲得がどのような流れ(プロセス)を持つ現象であるのかは十分に検討されていないと発表した。フロアからは、コツとは人によって異なるため研究として一般化できるのか、コツとは結果的に技術の習得ではないのかと等のアドバイスがあった。

包 健将くん(千葉大学大学院教育学研究科1年)は、中国の内モンゴル自治区で実施されているウジュームチン・ブフの技の動きについて柔道との類似点・相違点に関する研究について発表した。フロアからは、動作と時間の関係といった研究手法や、重心のとり方や3次元動作解析の方法等のアドバイスがあった。

山口智哉くん(千葉大学大学院教育学研究科1年)は、「経皮的脊髄直流電気刺激がSAQ関連退職に及ぼす影響」について、腰髄に対するtsDCSによる刺激を行うことでSAQ関連体力測定におけるパフォーマンスの変化を検討すると発表した。フロアからは、SAQそのものが研究として十分検討されていないのではないかと、提示されたSAQ関連体力はスピード・アジリティ・クイックネスを正しく示しているのか、測定する体力とはSAQなのかパフォーマンスなのか等のアドバイスがあった。

角田洋介くん(千葉大学大学院教育学研究科1年)は、「柔道未熟練者の受け身の特徴と指導法」について、柔道熟練者・未熟練者に対し、右背負い投げをかけ投げられた際の受け身を分析し、柔道未熟練者の受け身の特徴を把握し、よりよい受け身指導法を見出すことが目的であると発表した。フロアからは、研究の背景は中学校での武道必修化と柔道事故に関するものだが柔道での事故は授業より部活動でより起きているのではないかと、確立された指導法よりも、教員が実践できるかどうかの方が重要ではないのかなどのアドバイスがあった。

全ての発表を終えて座長から、研究を進めるにあたっては研究方法や研究手法等についてフロアからのアドバイスも踏まえてしっかりと整えてほしい、プレゼンテーションの場では決められた時間の中で「何を伝えたいのか」をしっかりと厳選し、正しい用語を正確に用いて相手に伝わるようにパワーポイントを作成したり話し方を工夫すべきだとアドバイスをした。次回以降の学会大会では研究成果をぜひ発表してもらいたい。